

特別聖年を過ごして

主任司祭 吉池 好高

フランシスコ教皇さまの呼びかけに応じて過ごしてきた「神のいつくしみの特別聖年」も、王であるキリストの祭日をもって終了します。

この聖年の間、どこまで神さまのいつくしみに信頼を寄せることができたでしょうか。聖年の残されたこの最後の月の間、改めて神さまのいつくしみに心を向けることができますように。わたしたちが神さまのいつくしみに心を向けることができないときも、わたしたちのすべてを知っていてくださる神さまは、わたしたちのことお忘れにはなりません。それが、神さまのいつくしみです。

旧約聖書の出エジプト記に語られている、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫たちが、エジプトでのあまりにも苛酷な現実の中で、もはや、自分たちに約束されている神さまの祝福を信じられなくなってしまった時も、彼らの主となることを望まれた神さまは、彼らの苦しみにいつくしみの眼差しを向け、彼らの叫び聞いておられたのです。「イスラエルの人々は労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた。神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた」(出エジプト記 2・23-25)。

時代と状況こそちがえ今の、わたしたちも、エジプトの地に生きたイスラエルの人々と同じような境遇の中にいます。そのような境遇を生きる者たちの最大の不幸は、自分たちのうめきや叫びを聞いてくださる神を信じられなくなっていることです。そのようなわたしたちにとって、出エジプト記に語られていることは慰めとなります。そこに語られている神は、うめき、叫ぶ人々の声を聞き、彼らに心を留めてくださるおからだからです。出エジプト記に語られている神は、十字架の上での御子イエスの叫びを聞いてくださいました。「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23・34)。

神のいつくしみの特別聖年を過ごしてきたわたしたちは、このような世界の現実を生きるすべての人々のうめきと叫びを心に留め、あらためて神のいつくしみにすがりたいと思います。